

市民プラザ塾「東久留米の歴史を学ぶ」が開校！



6月17日、市民プラザ塾「東久留米の歴史を学ぶ」がスタートしました。

全4回シリーズで東久留米に人類が住み始めた3万年前から今日までの歴史を約6時間で時に詳細に一気に駆け巡るコースです。

講師は生涯学習課学芸員・山崎丈先生です。

先生の講座を聞かれた人は多いと思いますが、通常は1.5時間のコース。

このような本格的な講座は初めてで、24名の受講生の期待は高まります。

第1回目は「湧水と川」です。



武蔵野台地は古多摩川に富士山の噴火による関東ローム層が堆積してできた扇状地です。（この生成が約7万年前）

標高180メートルの青梅市から標高20メートルの上野公園西郷さんの銅像あたりまで下っています。

その途中に東久留米があり標高は50メートルです。この50メートルが「湧水ライン」と呼ばれ、青梅市から東久留米までの古多摩川の急流が、ここで突然ユツリとした流れに変わります。ここで地上にほぼしり出るのが「湧水」というわけです。

東久留米に湧水が多いのはこのためですし、東久留米の湧水の特徴は、特定ポイントからだけではなくいたるところから湧き出ていることです。

それら湧水は、出水川・黒目川・揚柳川・弁天川・落合川・立野川となり黒目川水系を形作っています。

このように東久留米市は湧水の真上にある町なのです。

湧水のまちであることが歴史上二つのことに関係しているそうです。

一つは特に縄文時代（1万年前）には集落の発展で多くの人が住んでいたことが遺跡の存在でわかっていますが、この集落の存在に湧水が欠かせませんでした。

つまり食用に適さないデンプンから食べられるデンプン（アルファ-デンプン）に変えるには、洗みを取るための湧水が必要であったのです。

二つ目は、湧水は水温が18度程度と低く、稲作には適さなかったため、東久留米では稲作がほとんど行われなかったことです。

明治22年2つの新田を含む10の村落が一つの村に統合され名前を付けるとき、それぞれ自慢の歴史などをもつ各村落は「おれがむらこそ」と主張しあつたそうです。そこである知恵者が「共通する何か」を考えた末に「川」を思いついたそうです。

江戸時代には「久留目川-読みはくるめがわ」とされていたのですが、明治時代に「久留米」に。

当時、「米」は国力の基盤、富の象徴！つまり「米」は当時の久留米の人々にとっては「あこがれ」であつたはずですが、これが先生の意見です。

湧水は現在のまちの大切な財産であるだけでなく、東久留米の「歴史そのものである」・・・今回の講座の締めくくりでした。

（写真掲載に関しては関係者の了解を得ています）